

お不動様の御威光を蒙って

本寺 光真寺住職 黒田 俊雄



一言、挨拶をさせていただきます。

今日は、当山の十五周年、ならびにお不動様の大祭に、伊藤委員長様はじめ、大勢の方々においてをいただきましてお祝いをいたしますと共に、お不動様のお力をいただいで、それぞれ幸せな日々が送れるよう御祈願をさせていただいたわけです。

お不動様は十三仏の中でも一番前にお立ちになっており、お姿を拝見致しますと、うしろに火焰を背負っております。これは、人間が生きている間の四苦八苦

の苦しみをはじめ、いろいろな苦しみを焼いてくださったという意味を持っております。そして右手には剣を持ってますがそれは、仏の知恵を現わし、正しい生活を送れるようにという意味を示しておりますが、これは、煩惱を焼くための、きびしいお姿でもあります。内には非常にあたたかい慈愛の心を秘めておられて、正しいものの判断、正しいものの考え方をなさっている、そういうお姿がお不動様の御身上でございます。

ここのお不動さんは、お力があり、方丈さんもまた一生懸命信心なさって皆様の御加護をいただき、りっぱな伽藍が建てられました。本当に、皆様のおかげで、善光寺も立派になりました。今後も変わらない御法愛と御指導をいただきました、皆様もまた幸せになりますように、そして皆様の御先祖様の御霊も安らかに眠れるようにつとめていきたいものであります。

ひと言お礼の挨拶に代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

シルクロードの 佛様もよろこぶ

成寿山善光寺開創十五周年記念式典委員長

伊藤喜三郎

当成寿山善光寺が開創されて十五周年、いまその記念式典を挙行するに当り、一言ご挨拶を申し上げます。中国の古典に、「それ、功こうの成なるは、成るの日に成るにあらず、必ず由よりて来きたる」ところあり」という言葉がございますが、当善光寺は正にゼロからの出発でありました。それがいま、檀信徒二千を越えております。この目を見張る発展成長に直面して、その由よつて来たるものは何であつたかを考えますとき、まずもつて御開山棟庵白純和尚様の抜群の御遺徳に合掌低頭がっしやうていとうするものであります。



御開山様は、洵に傑出したお方で、人づくり寺づくりに、国境、人種の別を越えて、実に大きな貢献をなされたのであります。当善光寺も御開山の蒔かれた種子であり、また手づから育てられた苗でもありました。それを承継して現方丈は、よく御開山様の意を体し、親譲りの先見の明と、持ち前の逞しい実践力を駆使して、次々に障害を踏み越え乗り越えて、よく今日の大をなして下さったのであります。とはいうものの、人

間一人では何も出来るものではありません。さいわいにして、当善光寺は、開基の村岡家はじめ、篤信の皆様方から、陰に陽に、奇特の浄業を頂戴することができました。こうして僅々十五年にしてこの大きな結実を見ることが出来まして、檀徒総代として、また、記念式典委員長として、厚く御礼申し上げる次第であります。

善光寺は今や横浜随一となりました。もはやこれ以上の大を望むことなく、これからは如何にして内実を充実してゆくかが当面の大きな課題であります。その意味でこの開創十五周年記念式典は、創業から守成に転換する大きな節目でもあります。

「創業は易く、守成は難し」という言葉があります。これからが善光寺発展の正念場であります。何卒、篤信の皆様方の旧に勝る道念の高揚、善光寺外護の浄業をお願い致し、一言蕪辞を連ねて式辞とします。

只今式辞を読み上げましたが、皆様には是非申し上げ



たい心境がございませうので、ちょっとお時間をいた
きたいと思ひます。私が方丈様とお目にかからせてい
ただきましたのは、多分二十年ぐらい前で、法華經に
出てくる靈鷲山リョウじゆざんという所です。これはお釈迦様が初め
て法華經を説かれた聖なる山でございまして、その山
の頂上で方丈様と手を握り、肝胆相照らして今日に至
っているわけです。たまたま、ごく最近、中国に所用
がございましたので、足をのばしましてシルクロード
でテレビでも有名な敦煌に行きました。砂漠の中に突
然断層がございまして、そこに何百となく岩窟があり、
いろんな仏様が祀つてあります。かねて希望しており
ましたので行ってまいりましたんですけれども、そこ
でいろいろと見学しますと、どうしても一週間かかっ
て本日に間に合わないんです。そこで一日、大スピー
ドでお詣りしまして、それから、飛行機がないもので
すから車と汽車を乗りついで上海に着き、そこから飛
行機で、やっと本日に間に合つたんでございますが、
キロ数にして約四千キロ、汽車は五十八時間乗りづめ

ではせ参じたわけでございます。一つの洞窟の中に沢
山の仏さんがありまして、釈迦牟尼如来様をはじめ、
その仏様の数は概算しますと百万を越える大変なもの
で、しかも千何百年前の仏様がいらつしやるわけでご
ざいます。私がこういうことを申し上げるのは、その
何百万という仏様が善光寺の開創十五周年おめでとう
お前はそのお使いに來たんだというふうには、私は感ぜ
られてならない。皆様方の御先祖様、皆々様のご幸福
と、これから益々のご健勝、よろしく、おめでとう。
と、仏様がおっしゃつていたような気がいたしますの
で、それをお伝えしまして、ご挨拶したいと思ひます。
どうも失礼致しました。

伊藤喜三郎先生は著名な建築家で、伊藤喜三郎建築
研究所所長・建築協会会長の要職にある。一方、若年
の頃から絵画制作に情熱を燃やし、南画院副理事長。
「三喜庵」の雅号をもつて数々の名作を発表しておら
れる。本誌表紙絵、カットは先生を煩わしたものだ。